

機関雑誌『ツーリスト』における鵜飼の記述

瀬戸敦子

岐阜女子大学 文化創造学部

(2021年11月9日受理)

Descriptions of the Cormorant Fishing in “*The Tourist*”

Department of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

SETO Atsuko

(Received November 9, 2021)

要 旨

わが国最初の外客誘致、あつ旋機関であったジャパン・ツーリスト・ビューローが大正から昭和期にかけて刊行した機関雑誌『ツーリスト』では、現在でも観光客から人気の観光資源が邦文、英文で紹介された。本論では、岐阜市を代表する観光資源である長良川鵜飼に関して英文で記述された記事に着目する。当時の「遊覧遊び」のようすや現在でもみられるパフォーマンスや鵜匠による解説、もてなしが存在し当時の日本在住外国人執筆者も大いに喜んだと述べられていることがわかった。

キーワード：ジャパン・ツーリスト・ビューロー、インバウンド観光、長良川鵜飼、見せ鵜飼

I. はじめに

本論で対象とする機関雑誌『ツーリスト』は、大正2(1913)年から昭和17(1942)年にかけてジャパン・ツーリスト・ビューロー¹⁾が発行した邦文、英文併記の機関雑誌である。日本全国の観光地の紹介や地図、年中行事や口絵、紀行文、旅行心得だけでなく、今では

めずらしいジャパン・ツーリスト・ビューローの会報や論説、外賓記録などのデータも掲載された。

この『ツーリスト』は、あくまで日本人によって出版された雑誌ではあるものの、その一方で外客誘致を目的に、外国人にうつる日本の風景、文化、歴史などを紀行文として外国人執筆者が書いていることが大きな特徴である。日本で生活する外国人がこれから日本を訪れる外国人に「見てもらいたい日本」または「見せたい日本」を外国人の視点でとら

1) 日本交通公社の前身。明治45(1912)年に設立された、訪日外国人観光客の誘致と対応を目的とした半官半民の組織。

えている点では、当時の外国人が日本のどのような点に観光的魅力を感じていたかを知ることができる貴重な史料といえる。

著者が住む岐阜市の観光資源である長良川鵜飼は、機関雑誌『ツーリスト』に度々登場し、なかでも大正14年7月号では外国人執筆者によってはじめて紀行文としてまとめられた。本論では、この大正14年での記述に焦点を絞り、当時の外国人がどのように鵜飼を観ていたかを考察したい。

II 大正から昭和にかけての観光鵜飼

日本に現存する鵜飼のなかでも最も古いといわれている「ぎふ長良川鵜飼」は、1300年以上の歴史を誇り、今では観光鵜飼、「見せ鵜飼」とよばれ、多くの観光客を魅了する。そもそも鵜飼とは、鵜という生物の特性を生かした漁法である。その漁法を、珍しいものとし、宴会の席で披露したとされるのが、織田信長公と考えられている²⁾。

和田(2007)は、その後鵜飼が観光化の過程をたどることになったのは、遊船会社が設立された明治38年とした³⁾。それによると、大正期の鵜飼は、納涼での目的を含めて遊覧船を出していることから、和田は当時の鵜飼のようすを「遊覧遊び」とよび、観覧客は「いわゆる特権階級」の人々であり、「避暑をかねた遊興だった」と述べている⁴⁾。また、彼らの目的は単なる鵜飼観覧に留まらず、「芸妓を呼んで食事や酒を楽しんだ」。

- 2) 1569年6月、武田信玄の使者を迎え「岐阜の河に鵜匠を集め、鵜を使わせて見せ、帰りには、鵜飼で漁獲された鮎を土産に持たせた」という。
- 3) この時期を「見せ鵜飼の始まり」と和田(2007)はよぶ。
- 4) 大正12年6月12日の朝日新聞には、「一人では観ることが出来ず、多額の費用を要し資産階級の者でなければ夏の一晩を涼しく過ごし鵜飼がみれない」とある。

昭和以降の鵜飼は、遊船の経営母体が岐阜市となったことにより、漁業としての鵜飼だけでなく、観光業としての鵜飼の役割が加わり、観光資源として全国へ知れ渡ってゆく。第二次世界大戦後の鵜飼は、国内だけでなく国外へもPRされ、「日本の観光資源」として認められ、さらに遊覧客が増加していった。大戦前後では遊覧客の客層に違いがみられた。戦前は大正期と同様に「上流階級、資産階級」であるのに対し、戦後は接待で利用する団体客も増え、「豪遊」化していった⁵⁾。

III 機関雑誌『ツーリスト』

大正2年に刊行された『ツーリスト』は、初版1000~1500部が国内外のジャパン・ツーリスト・ビューロー支部案内所及び代理店⁶⁾へ渡った。英文併記となったのは、翌年の大正3年4月のことである。邦文、英文で取り扱う観光地や資源の内容が、同号で一致する場合と異なる場合とがあるものの、雑誌中で取り上げられた当時の観光地は、富士山、箱根、諏訪湖、京都、十和田湖、日光や伊勢などといった、今でも訪日外国人旅行者に人気の自然・文化資源である。

『ツーリスト』は現在、公益社団法人日本

5) 当時、鵜飼観覧と同時に飲食や芸妓を楽しむ庶民が増え、大衆化した。

6) 『ジャパン・ツーリスト・ビューロー 事業報告 大正5年度』(国立国会図書館デジタルコレクション)によると、当時の本部(東京)支部には朝鮮、大連、臺北、案内所には東京、横浜、神戸、下関、長崎、釜山、京城、大連、旗順、奉天、長春、代理店に紐育が設けられていた。海外代理店としては、紐育、浦監、上海、香港、マニラ、シンガポール、カルカッタ、コロンボ、パナン、ポートサイド、マルセイユ、バ里、ハーブル、倫敦、リバプール、マンチェスター、グラスゴー、ミズルスボロウ、アントワープ、ロッテルダム、シアトル、桑港、タコマ、ホノル、シドニー、メルボルン、ロスアンゼルスがある。

交通公社が運営する旅の図書館（東京都）で閲覧可能だ。過去29年間の英文表記で鵜飼についての記述があったのは、大正14年、昭和4年、5年、そして9年である⁷⁾。この時代の日本は、海外へ向けた旅行ガイドブック等の出版物が多く作られた。わが国で初めて海外を意識し作成された旅行ガイドブックは、大正2年のことである。JAPAN（邦名『日本案内』）は、大正期から昭和期にわたり度々改訂されるが、ジャパン・ツーリスト・ビューローが統一して発行に関わった。制作目的は、訪日外国人観光者数を増やす為に、異文化をもつ外国人に日本のよいところを紹介することであった。その後、*Japan: The Pocket Guide* や *Japan: The Official Guide* といった旅行ガイドブックが出版された。これらは全て外客誘致政策の一部として考えられ、日本を訪れる外国人らが日本でどこをどのように周遊したらよいか書かれている。

IV 外国人執筆者による記述

1. 執筆者 J.S.Happer

『ツーリスト』で外国人執筆者による「鵜飼遊覧」に関する初めての記述とされるのが、大正14年7月⁸⁾である。タイトルは“*CORMORANT FISHING AT GIFU*”，著者はアメリカ人浮世絵研究家ジョン・スチュワート・ハッパ―（John Stewart Happer, 1863.4.9-1936.12.19）である。

ハッパ―は、明治24年と42年に来日し、生涯歌川広重の研究者として知られた人物である。彼が、『ツーリスト』において鵜飼の執筆をした理由と経緯については不明であるものの、日本の芸術・文化の研究の一環とし

て、記事を書いたと推測できる。

2. 記述内容

ハッパ―の記事は、5ページにわたって書かれており、長良川鵜飼の遊覧船に乗船してから下船するまでを時系列で述べている。当時の鵜飼「遊覧遊び」のようすや歌川広重の研究者らしく、鵜飼の風景を色彩豊かに表現しているのが特徴である。

日本人の友人が用意した観覧船には、既に数人の三味線を奏でるゲイシャ (geisha) が同船しており、それらによって哀調的なメロディが謡われる。ハッパ―は、観覧船が上流へ登っていくにしたがって、周辺の気温の移り変わりを肌で感じ、すこしずつ涼しさを感じ、川からくるそよ風が、これまでの蒸し暑さによる身体の疲れやだるさを一気に消し去ってくれると述べている。より上流へ行き、ハッパ―は涼しさを感じながら、“In the clear sunset sky streaks of green and red and gold appear, as if sketched in with a giant’s brush.”と周辺の自然環境の緑、日没の太陽の光（赤）、そして月の光（金）は、まるで筆でスケッチされたような色彩と描く。他の観覧船が上流付近に着いたころ、“Now the colours fade out of the sky, and it takes on the deep evening Hiroshige blue, …”とあり、広重ブルーつまり、ペロ藍に深まった夜の空を表現する。

ハッパ―はその後、鵜飼観覧の準備が整ったものの、日本人は決して急がず“*Yu-suzumi*”を各々で楽しんでいると日本人の鵜飼の楽しみ方について述べる。およそ100以上の遊覧船には多くの観覧客が乗船し、食事を楽しむようすや客の中には、大きな声で歌う者、ゲイシャの弾く三味線の音や小舟に乗った花火業者がさまざまな種類の花火を売りに来ているようすを観察している。そしてその花火が起こす情景を、“like a whale to spout, like a

7) 外国人執筆者による紀行文や鵜飼に関する歴史や漁法について詳細が述べられている号の場合。

8) The Tourist Vol. XVII No. V Consecutive No. 73

fairy jump”と表現している。当時の鶺鴒の楽しみかたをハッパーの体験談から想像することができる。

いよいよ鶺鴒の始まりの場面では、“…, every eye is turned to the upper waters, and with a suddenness as if the drop curtain had been raised, there bursts into view a row apparently of burning boats preceded by a flock of dark birds fluttering and floundering in the water.” 観覧客すべての目線が上流へ注がれ、それはまるで降りた幕が上がったような出来事のように述べ、ここからエンターテインメントの始まりとする書きぶりである。ここでは、鶺鴒のことを黒い鳥の群れと称している。

鶺鴒のことを The head fisherman とし、15羽ほどの鶺鴒を操り、首結びをされた鶺鴒は魚を捕らえるために勢いよく水面に潜る。捕らえた魚が鶺鴒の喉あたりに溜まったところで鶺鴒が魚を吐かせ、鶺鴒たちは再び水面下へと戻ってゆく。ハッパーはこの鶺鴒に魚を捕らえさせる漁を performance と紹介する。

クライマックスの総がらみのシーンでは、観覧船がより近くで鶺鴒を見ようと場所取りをするようすや、鶺鴒が魚を捕らえた際に鳴いたかすれた声、鶺鴒の叫び声が間近に聞こえるようすを描写する。そんな大混乱 (pandemonium) ともいえる状況は、観覧客の笑い声と音楽が織りなす静かながらも、愉快的ひと時によって静まりかえる。そんなとき、ある鶺鴒匠がハッパー含む外国人観覧客を見つけると、鶺鴒舟を観覧客に近づけ、間近に鶺鴒が魚を捕る過程が見えるようにもてなしてくれたと述べている。

これらのようすから、この時代すでに「華やかで賑わい」のある長良川鶺鴒が行われていたこと、鶺鴒匠が客を観覧船に寄りながら、パフォーマンスしていたことがわかる。

鶺鴒終了後、鶺鴒たちは年功序列に止まり木

に乗り、鶺鴒匠からエサを与えられる。現在も同様であるが、このようすについてもハッパーは興味深く描写する。そして観覧客も下船場へ戻り、彼らも鶺鴒をあとにするが、ハッパーは最後に“…the guest are leaving, out go the lanterns, and as we too turn our backs on the water, we hear a sort of sleepy chirp and a rustle, which tells us that the cormorants also are going to their well-earned rest.”と締めくくっている。人間の身代わりとなって漁をする鶺鴒たちが眠そうな甲高い声をあげているようすを見て、パフォーマーである鶺鴒たちをねぎらっているような記述となっている。

VI おわりに

大正期の長良川鶺鴒は遊覧鶺鴒ともよばれ、誰もが気軽に楽しめるものではなかった。そんな中、外国人であるハッパーによって記された鶺鴒体験は、当時の夕涼みのようすや日本人観覧客の鶺鴒見学前の時間の過ごし方に注目しつつ、ハッパー自身が日本人らと同じように夕涼みをしながら、鶺鴒と鶺鴒匠がくり広げるパフォーマンスをたのしんでいるような表現が文中からみられた。日本のうだるような蒸し暑さが日の陰りと共に徐々に涼しくなっていく様や、鶺鴒体験最後には、鶺鴒匠が近くで鶺鴒や鶺鴒の獲った魚を紹介する様など、ハッパーにとっては忘れられないような日本での体験になったはずである。

この日本でしか体験することができないような観光コンテンツは、近年インバウンド観光において、さらに注目度を増し、with/after コロナの訪日観光ではなくてはならない「コト体験」とされる。

阿部 (2016) は、第二次世界大戦後日本の占領期における米軍やその家族、外国人パイヤーによる日本観光ツアーについて考察し

た。そこでは、昭和23年6月日本交通公社主催の7日間「制限付観光旅行⁹⁾」が、対象とされる外国人客へ発売され、その後昭和24年には14日間、23日間、31日間と旅行期間が長くなった¹⁰⁾。ここで筆者は、23日間、31日間の「制限付観光旅行」の旅程には、最初発売されたルートに加え、日本の文化や自然、産業を体験できる資源が取り入れられていることにも注目した。この体験できる資源として加えられたのが、岐阜の鵜飼体験と三重県鳥羽の真珠養殖場見学であった。

戦後制限下に紹介された日本の観光資源のひとつに岐阜の鵜飼があった理由として考えられるのは、長良川鵜飼は皇室の保護を受け続けているということだ。明治23年には古津、立花、嵩田の3カ所が御猟場に定められ、同時に鵜匠は宮内省主猟寮(当時)属した。いまでも年8回の御料鵜飼が行われている。鵜飼業は日本を代表する古代漁業であり、戦前から国賓が来日した際には鵜飼を披露する。

前述のように「コト体験」を重要視するインバウンド観光において、どのように鵜飼を「見せる＝魅せる」かが問われている。本論で対象としたハッピーによる鵜飼体験記事は、日本人だけでなく、当時世界中に支部、

代理店を置いたジャパン・トラベル・ビューローを通して多くの外国人の目にも触れたであろう。

いま、わたしたち消費者の観光経験は豊富となり、旅行先の情報収集も安易になった。旅行ガイドブックや旅行雑誌、紀行文には単なる観光情報だけでなく、その「地域に対する専門性を帯びた資格と情報の提供が求められる」。現地ガイドも同様だ。今後も過去にどのような人物が鵜飼を訪れ、何を感じ取ったのか、調査してゆきたい。

参考・引用文献

- 1) 赤井正二. 旅行のモダニズム—大正昭和前期の社会文化変動—. ナカニシヤ出版. 2016
 - 2) 阿部純一郎. 戦後の国際観光とアメリカの「脱領土性」: 占領期の日本観光ツアーを中心に. 椋山女学園大学文化情報学部紀要. 第16巻, pp. 1-22. 2016
 - 3) 奥野卓司. 鳥と人間の文化誌. 筑摩書房. 2019
 - 4) 可児弘明. 鵜飼—よみがえる民族と伝承—中公新書. 1996
 - 5) 一般社団法人人文地理学会. 人文地理. 第73巻第3号
 - 6) 瀬戸敦子. 長良川鵜飼の観光アピールポイントの変化—英語版旅行ガイドブックを通して—. 岐阜女子大学紀要. 第49号, pp. 33-42. 2019
 - 7) 武内博編. 来日西洋人名辞典. 日外アソシエーツ. 1995
 - 8) 中村宏. 戦前における国際観光(外客誘致)政策—貴賓会, ジャパン・ツーリスト・ビューロー, 国際観光局設置—. 神戸学院法学36-2, pp. 361-387. 2006
 - 9) 和田直也. 長良川鵜飼の再編成—観光への変化と担い手に注目して—. 茨城地理8. pp. 1-21. 2007
 - 10) 国会図書館デジタルコレクション (0000005
- 9) 当時の7日間パッケージツアーは1人175ドル(食事・宿泊・交通費・ガイド料その他諸経費込み)で販売された。7日間の制限付観光旅行の対象旅客は、横浜港または羽田空港利用者のみであった。翌年、14日間、23日間、31日間の制限付観光旅行では、神戸港を利用する外国人も対象となり、旅先が関東方面だけでなく、横浜から神戸間の通過観光旅行が許される。制限付観光旅行のルートは、観光庁がすすめる東京、箱根、富士山、名古屋、京都、大阪を巡るゴールデンルートと同様に関東(横浜、東京、鎌倉、箱根、熱海)から京都、奈良、その後再び関東へ戻り日光を訪れている。詳細については、阿部(2016)を参照されたい。
- 10) それぞれの観光地での見学や買い物時間もゆっくり取られており、滞在期間が長くなれば長くなるほど自由時間も多い。

- 71880) ジャパン・ツーリスト・ビューロー編.
ジャパンツーリストビューロー事業報告. 大
正5年度
- 11) 公益財団法人日本交通公社 旅の図書館
- ホームページ. <https://www.jtb.or.jp/library/>
(2021.11.6最終閲覧)
- 12) ぎふ長良川鶴飼ホームページ. <https://www.ukai-gifucity.jp/ukai/> (2021.11.7最終閲覧)